

連載 千座の置き戸（ちくらのおきど）

第二百七十七回 ジョージ・L・ウエスト博士のこと

南出喜久治（令和7年10月1日記す）

ウエスト博士のことについては、何度も述べて来たが、平成24年6月1日の「青少年のための連載講座）祭祀の道「第三十九回 臣民の条件」でも詳しく書いたので、一読していただきたい。

ウエスト博士は、「日本国家構造論」のことをいち早く知つてをられ、平成6年9月24日に御殿場での講演に私を招待していただいた。

翌25日は、昭和22年に熱海の錦ヶ浦で、帝國憲法の復元のための人柱として自決された清水徹博士の命日であり、慰霊のための日程に合はせていただいたのである。

そして、特別に私と話をされ、清水澄博士の遺志を継いでもらった私と会へたことで、今回の訪日の目的が達成できたと喜んでいただいた。

博士が私の書作を来日前に知つてをられたのは、馬野周二先生がアメリカに居られる博士に送られたためである。

そして、参加者全員で、博士の先導で、天皇陛下万歳を三唱し、引き続いて「ラバウル小唄」を合唱したことを今も鮮明に思ひ出す。

そして、「ラバウル小唄」は、占領憲法無効論（真正護憲論）の応援歌だと言はれて、二度繰り返された。これが応援歌であることの意味は、「第三十九回 臣民の条件」でも書いたとおりであり、後で解つたことである。

そのことは、それから一年ほどが過ぎたころ、馬野周二先生とお会いしてから、その含意を理解することができた。馬野周二先生は、博覧強記の国際人であり、私の真正護憲論を当初から支持してゐた。その馬野先生から、私に連絡があり、どうしても会ひたいので京都に来たいと仰つて、指定された京都のホテルでお会ひしたことがあつた。

それまでも馬野先生とは長く親交がある。私が、謝罪決議違法確認訴訟を提起したり、教科書訴訟やNHK訴訟などを提起したときも、真つ先に応援していただいたり原告団に加はつていただいたことがある。

私の真正護憲論の熱心な支持者でもある。

そして、馬野先生は、博士とは米国在住時からの親密な関係にあり、博士の『国際秘密力』は、馬野先生が熱心に博士に勧められて上梓されたものであると説明され、この書籍を博士からは是非とも私に一冊贈呈したいとの直接の依頼と伝言があつて持参された。

この『国際秘密力』を手にして表紙をめくると、博士の写真と日の丸、そして、天皇陛下にお仕へしたいといふ文字が目飛び込んできて、その神々しさに思はず目頭が熱くなり、今思ひ出すたびに涙がこぼれる。

博士は、その後、迫害を逃れてメキシコに入り、そこで神社を建立して神主をされてみると馬野先生が話された。

いまは、博士と馬野先生の志と勇気を私もまた受け継いで全ふすることを誓ひながら、この御恩に報ひたいと考へてゐる。